

大学の世界展開力強化事業(平成29年度選定) 北海道大学 取組概要

【事業の名称】(選定年度29年度・(タイプA(インド)))

持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム(STSIプログラム)

【事業の概要】

インドにおける輸送システムと社会インフラ構築に関わる種々の課題について、日印の人材がチームを作りこれに取り組む際、その成果を最大化できるような能力を有する人材を育成する。本プログラムでは、基礎論と日印双方の言語・文化基礎を学習し、その後具体的なテーマ設定を行ってインターンシップを行う。また、コンソーシアム参加企業の協力のもと、「日印サステナブル開発コンソーシアム」を設立し、持続的な人材交流と育成を目指す。

【日印サステナブル開発コンソーシアム】



北海道大学の5部局

| | |
|---------|-----------------|
| 工学院・工学部 | 輸送システム、社会インフラ |
| 情報科学研究科 | 通信インフラ、社会ビックデータ |
| 環境科学院 | 環境インフラ、衛生管理 |
| 公共政策学 | インフラ政策、環境政策 |
| 電子科学研究所 | エネルギー、社会ビックデータ |

交流学生数

インド学生
80人

日本学生
80人



【交流プログラムの概要】

本プログラムの基礎論、日印双方の言語・文化基礎を事前学習し、その後具体的なテーマ設定を行って短期インターンシップを行う。さらに、長期滞在プログラムでは、単位互換を伴う専門科目の学習も行う。そして、日印メンバーが混在するチームで共同研究を実施して、インドの持続的課題に対して、異なる専門性の視座から議論することによって、「チームワーク型国際共同研究力」を育成する。FDや外部評価、教育交流研究会等を行い、プログラムの質の向上に努める。

【本事業で養成する人材像】

インドが抱える輸送システムと社会インフラ及び環境に関する課題について、自らの専門性を活かしつつ、日印メンバーの強み・弱みを認識するチームを編成し、課題解決にむけて成果を最大化できるようなチームワーク型国際共同研究力を有する人材。加えて、輸送システムや社会インフラ構築の正の側面だけでなく、その環境影響や周辺住民への影響など、負の側面も包含した持続可能な開発を実現できる人材。

【本事業の特徴】

日印サステナブル開発コンソーシアムを構築し、人材育成に有効な産官学連携ネットワークを形成する。そしてインドが抱える輸送システムと社会インフラ及び環境に関する課題の解決に当たる。学生の成果報告会は、コンソーシアム参加企業の出席のもとで実施し、成果の評価や将来の課題について助言を得るほか、本事業期間終了後も、派遣／受入事業にかかる資金の共同出資やインターンシップによる人材交流の維持を可能にする。

【交流予定人数】

| | H29 | H30 | H31 | H32 | H33 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 学生の派遣 | 5 | 15 | 18 | 21 | 21 |
| 学生の受入 | 5 | 15 | 18 | 21 | 21 |

1. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(インド))

持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム(STSIプログラム)

■ 交流プログラムの実施状況



〈インターンシップ後の報告会の様子〉

2018年2月から3月にかけて、短期間のインターンシップ相互派遣を行い、事前にTV会議システムを使用した試行授業に双方の学生を参加させ、プログラム概要や各校の情報、双方の言語・文化の基礎等について、学生が学ぶ機会を設けた。派遣・受入期間終了時の学生による成果発表にもTV会議システムを用い、相互の教員による質問や総評等を交わすための仕組みを構築した。

平成30年度の受入に向けた募集は2月より開始し、IIT3校からの参加希望者を選考、計画通り15名を受入れる予定である。本学からの派遣学生についても、関係部局への通知、ホームページ、各種SNS、説明会等を通して募集を開始した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

IITハイデラバード校へ3名、マドラス校へ2名、計5名の学生を、2週間～1ヶ月程度派遣した。

○ 外国人学生の受入

IITハイデラバード校、マドラス校より、各2名、計4名の学生を、2週間～1ヶ月程度受け入れた。

| | H29 | |
|-------|-----|----|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 5 | 5 |
| 学生の受入 | 5 | 4 |

IITボンベイ校を含む3校との大学間協定も締結され、平成30年度からは工学以外の部局との相互派遣も可能となった。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

2018年1月に国際運営委員会を本学で開催、プログラムの概要を共有し、コンソーシアム要項、リエゾンデスク設置の合意、相互派遣・受入、平成30年度からの本格実施に向けたカリキュラム、単位互換等について、認識を共有し、今後の取組への協力を確認し合った。

本プログラムにかかる基礎科目について、カリキュラム及びシラバスを日本語・英語で作成し、開講準備を行った。また、外部講師を招聘したFDでは、インド言語・文化基礎、他大学が実施するインドとの先行プログラムについて教職員が学び、インドの学生向けに試行した日本語・日本文化の授業とともに、基礎科目の本格開講に向けたフィードバックができた。

単位認定と修了証の授与については、国際運営委員会で厳格に管理するとともに、平成30年度より、各科目、カリキュラム全体について、受講学生による評価をアンケート方式で行い、今後の質の向上に役立てる。



〈国際運営委員会の様子〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

2017年11月にセントラルオフィススタッフ3名が着任し、プログラム運営を担う事務組織を立ち上げ、IIT各校の窓口との連絡調整、リエゾンデスク設置の依頼を行った。2018年1月の国際運営委員会では、関係教職員を招聘し、相互の受入体制について確認し、2月からの相互インターンシップに備えた。また、2～3月にかけて、本学教職員がインド各大学を訪問し、翌年度以降の相互の受入について協議した。

2018年2月からの相互インターンシップ参加学生には、事前にTV会議システムを通じた互いの言語・文化基礎の試行授業を行い、日本人学生には渡航前のオリエンテーション、インド人学生には渡日後の短期の日本語・文化基礎講座を提供した。

平成30年度の履修ガイドについては、学生募集時の募集要項・説明会等で、情報提供を行うとともに、ウェブサイトを更新した。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

ホームページ、Facebook、Twitter、Instagramを開設し、プログラム概要、各種のお知らせ、募集情報等の日本語・英語での周知を開始した。パンフレット、PR動画等を作成し、インド各校、新入学生への周知の準備をした。

2018年1月に開催した本事業のキックオフイベントについて、大学広報誌、ウェブサイトや、文教ニュースへ日本語または英語で記事を提供し、広く本事業について情報を提供した。

外部講師を招聘したFDでは、インド言語・文化基礎、他大学が実施するインドとの先行プログラムについて教職員が学んだ。平成30年度には、教育交流研究会を開催し、今後の教育の質の向上に向けた事例を共有できるようにする。

■ グッドプラクティス等

派遣・受入前の試行授業では、参加学生がプログラムの概要、派遣先の情報、相互の言語・文化基礎について学ぶことができた。特にIITの学生には、本学での受入期間中に、外部講師による初歩の日本語・日本文化の授業を提供したところ、目に見えて周囲とのコミュニケーションが活発になり、インターンシップへの意欲を喚起することができた。

平成30年度からは正規科目として、日本語・文化基礎、インド言語・文化基礎を開講するため、双方の学生のより一層のコミュニケーション力向上の一助となることを期待できる。

2. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(インド))

持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム(STSIプログラム)

■ 交流プログラムの実施状況



〈「STSI基礎論」でのグループワークの様子〉

- 平成30年度より、本プログラムにかかるSTSI基礎科目を本格的に開講した。
「STSI基礎論」(2単位) 本学学生7名、インド工科大学(IIT)生15名受講
「インド言語・文化基礎」(1単位) 本学学生32名受講
「日本語・文化基礎」(1単位) IIT生15名受講
- 単位取得を伴う相互インターンシップで、北大生13名を派遣し、IIT生15名を受入れた。
インターンシップ(1~2単位)
派遣先開講科目(2~12単位)
- 全ての修了要件を満たした本学学生7名、IIT生15名に修了証を授与した。
- 日本人学生のプログラム参加を促進するため、IITマドラス校への1週間の短期スタディツアーに13名を派遣した。
- 平成31年度の受入学生の募集は11月から実施し、18名を受入予定。本学からも、平成31年度は18名の学生を派遣予定である。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

IITハイデラバード校へ5名、ボンベイ校へ4名、マドラス校へ4名、計13名の学生を、3週間~3ヶ月程度インターンシッププログラムで派遣した。また1週間のスタディツアーでマドラス校へ13名派遣した。

○ 外国人学生の受入

IITハイデラバード校、ボンベイ校、マドラス校より、各5名、計15名の学生を、3週間~3ヶ月程度受け入れた。

工学部・工学院だけでなく、関係部局である環境科学院での受入も実現した。

| | H30 | |
|-------|-----|----|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 15 | 26 |
| 学生の受入 | 15 | 15 |

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- STSI基礎科目では、TV会議システム・eラーニング教材を用い、学生の学年暦や渡航スケジュールに合わせた柔軟な履修を実現した。また、受講学生からのアンケートを収集し、授業の改良に役立てることができた。
- 派遣・受入学生のインターンシップ報告会では、本学関係教員とともに、IIT各校の指導教員もTV会議システムを通して学生の発表に質問、評価を行うことで、日印双方で学習成果を確認することができた。
- 2018年10月に国際運営委員会を本学で開催した。プログラムの実施状況を確認し、修了の可否について厳格に審査を行うとともに、次年度の実施計画等について協議した。
- 2019年1月に、教育交流研究会を本学で開催し、東京大学、北陸先端科学技術大学院大学の教職員、本プログラムに関心を持つ民間企業5社からの参加を含めた22名が、日印での教育交流、人材育成について情報交換を行った。



〈インターンシップ報告会の様子〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- セントラルオフィスとIIT各校のリエゾンデスクが連携し、学生の派遣・受入に伴う受入教員とのマッチング、航空券・宿舎の手配、ビザ取得の支援、履修科目の案内・登録・単位付与等の事務手続きを行った。派遣学生に対しては、渡航前説明会、事前教育を行い、十分な準備が行えるようにした。受入学生には、到着時にサポート学生が宿舎への案内を行い、セントラルオフィスがオリエンテーション、事務手続きを支援することで、速やかに環境に順応し、インターンシップが行える環境を整えた。日本人学生の渡航後には、IIT各校で同様に受入をサポートする学生、事務手続きの支援が提供された。
- 9月に本学教員3名がIITハイデラバード校、ボンベイ校を、2019年2-3月にIIT3校から6名の教員が本学を訪問し、次年度以降の相互の受入について協議するとともに、互いの研究内容の紹介を行った。
- 2019年3月、IITマドラス校の協力の下、13名の学生を教職員が引率し、同校とリサーチパーク、インド企業等を訪問するスタディツアーを行い、学生がインド及びIITに興味を持つきっかけとすることができた。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

- ホームページ(<http://labs.eng.hokudai.ac.jp/office/iao/stsi/>)、SNS等で、日本語・英語での情報提供を積極的に行った。
- 2019年1月に開催した教育交流研究会では、他大学や、民間企業からの参加者と情報を共有し、同日開催のインターンシップ報告会では、その成果への理解を深めた。この様子は大学広報誌及び東京大学のプラットフォーム事業のホームページに掲載した。
- 3月に開催したインターンシップ報告会後には、学生と企業参加者の座談会を行い、互いにインドでの経験やその活用について、情報交換を行う場とすることができた。
- 履修ガイド、パンフレットを日本語・英語で作成し、学生や企業へ情報提供を行った。
- 本プログラムを通して情報を得たIIT生から、本学大学院に出願する者が出たり、本プログラムを修了した本学学生が、長期の交換留学を志望する等、本学の更なる国際化につながっている。

■ グッドプラクティス等

- 本年度より正規科目として開講した「インド言語・文化基礎」、「日本語・文化基礎」により、日印の学生が互いの文化について理解することで、派遣先での順応に役立てることができた。また、ショートPBLを取り入れた「STSI基礎論」では、共に学ぶグループワーク、プレゼンテーションを通して、より実践的に協働することにより、学生同士のコミュニケーションが活性化し、授業の枠を超えた相互支援が、その後も継続して行われることにつながった。
- 教育交流研究会と学生によるインターンシップ報告会では、活発な意見交換が行われ、他大学や企業の参加者から好評を得ることができ、その後、数社の企業の参加を得て、「日印サステナブル開発コンソーシアム」設立につながることができた。

3. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(インド))

持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム(STSIプログラム)

■ 交流プログラムの実施状況



〈「STSI基礎論」でのグループワークの様子〉

- 令和元年度も、引き続き本プログラムにかかるSTSI基礎科目を開講した。
 「STSI基礎論」(2単位) 本学学生15名、インド工科大学(IIT)生18名受講
 「インド言語・文化基礎」(1単位) 本学学生20名受講
 「日本語・文化基礎」(1単位) IIT生18名受講
- 単位取得を伴う相互インターンシップで、北大生18名を派遣し、IIT生18名を受入れた。
 インターンシップ(2単位)
 派遣先開講専門科目(2~6単位)
- 全ての修了要件を満たした本学学生11名、IIT生17名の修了を認定した。
- 令和2年度の受入学生の募集は11月から実施し、22名の受入が承認、本学からは21名の学生を派遣予定である。ただし新型コロナウイルスの影響により、インドからはオンラインでの参加、本学学生の派遣規模の縮小も検討中。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

IITハイデラバード校へ8名、ボンベイ校へ5名、マドラス校へ5名、計18名の学生を、3週間~3ヶ月程度インターンシッププログラムで派遣した。

○ 外国人学生の受入

IITハイデラバード校、ボンベイ校、マドラス校より、各6名、計18名の学生を、3週間~4ヶ月程度受け入れた。

工学部・工学院だけでなく、関係部局である環境科学院での受入も実現した。

| | R1 | |
|-------|----|----|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 18 | 18 |
| 学生の受入 | 18 | 18 |

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- STSI基礎科目では、TV会議システム・eラーニング教材を用い、学生の学年暦や渡航スケジュールに合わせた柔軟な履修を実現するとともに、学生の復習や学習の進捗把握にも役立てることができた。
- 派遣・受入学生のインターンシップ報告会では、本学関係教員・IIT各校の指導教員の他、コンソーシアム企業参加者の前で、英語による発表を行い、質疑応答にも自信を持って対応する様子が確認でき、本プログラムの高い教育効果を、日印双方及びコンソーシアム企業とで共有することができた。
- 2019年10月に国際運営委員会を本学で開催した。プログラムの実施状況を確認し、参加校の役割と今後に向けた改善点等について協議した。
- 所定の単位を修得した本学学生11名、IIT生17名に共同修了証が授与された。
- 2020年2月に外部評価委員会を本学で開催し、これまでの成果について高い評価を受けるとともに、今後に向けての助言を得ることができた。



〈インターンシップ報告会の様子〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- 昨年度に引き続き、本学のセントラル・オフィスとインド工科大学各校のリエゾン・オフィスとの連携により、学生募集、学生・教員の派遣・受入等、評価、プログラム共同修了証の授与等にかかるプログラム運営をスムーズに進めることができた。
- 本学教員を2019年9月に4名、2020年2月に3名、IIT3校へ派遣、IIT3校の教員を2019年10月に6名招へいし、今後の学生交流の促進・連携について協議した。
- 受入・派遣学生とともに、インターンシップ前後で自己評価を行わせ、成果報告会では、日印双方の教員の前で発表をすることで、学生自身が本プログラムに参加した成果を実感することができた。
- 2019年度修了生のうちIITマドラス校の1名が、2020年度から本学工学院博士後期課程(英語プログラム)に進学することとなった。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及



〈座談会の様子〉

- ホームページ(<https://eprogram.eng.hokudai.ac.jp/office/iao/stsi/>)、パンフレット、SNS、シンポジウム等で、日本語・英語での本事業の概要・目的・実施状況に関する情報を引き続き発信し、インドに関連の深い企業や将来インドとの協力関係構築に興味を持つ団体・企業に対し、コンソーシアムへの参加を働きかけた。
- 2019年度に開催した全9回の学生による成果報告会には、企業からも延べ11名の参加があった。
- 2019年12月の報告会后に企業参加者と学生が直接話し合う座談会を開催し、双方にとって大いに刺激を得られる場を提供することができた。これらの取組により、2019年度は新たに企業6社からコンソーシアムへの参加表明を得ることができた。

■ グッドプラクティス等

- インド人修了生のうち1名が、本学博士後期課程の国費留学生に選ばれたり、日印修了生から、プログラムが目標とする「持続可能な輸送システムと社会インフラの構築」に関係する分野に就職する者が出るなど、プログラムの経験を活かしたキャリア形成に寄与した。

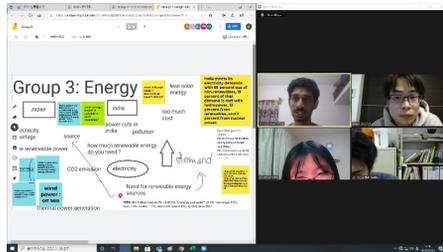
4. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

【北海道大学】

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(インド))

持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム(STSIプログラム)

■ 交流プログラムの実施状況



「STSI基礎論」でのグループワークの様子

- 令和2年度は、本プログラムにかかるSTSI基礎科目をオンラインで開講した。
「STSI基礎論」(2単位) 本学学生4名、インド工科大学(IIT)生8名受講
「インド言語・文化基礎」(1単位) 本学学生6名受講
「日本語・文化基礎」(1単位) IIT生9名受講
- 単位取得を伴うインターンシップは、オンラインでの実施となり、北大生1名を派遣した。
インターンシップ(2単位)
- 全ての修了要件を満たした本学学生1名の修了を認定した。
- 令和3年度の入学生募集は11月から実施し、17名の受入が承認されたが、新型コロナウイルスの影響により、基礎科目はオンラインでの受講、インターンシップは学生の希望によりオンラインと年度後期への延期のどちらかで実施予定。本学からはのべ11名が基礎科目を受講、3名がオンラインインターンシップで派遣予定である。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

IIT生と共修する科目を、4名の本学学生が受講した。また1名がオンラインインターンシップで、IITボンベイ校教授からの研究指導を受けた。

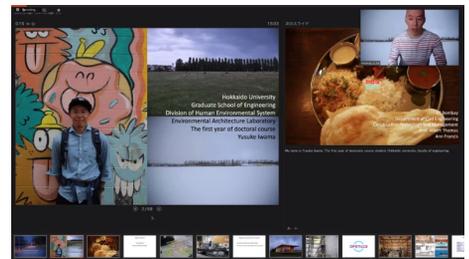
○ 外国人学生の受入

IITハイデラバード校、ボンベイ校、マドラス校より、各3名、計9名の学生を特別聴講学生として受入れ、オンラインでの履修・単位取得を実現した。

| | R2 | |
|-------|----|----|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 21 | 5 |
| 学生の受入 | 21 | 9 |

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- STSI基礎科目全てを、オンライン会議システム・eラーニング教材を用いて提供し、コロナ禍での学生の受講環境に合わせた柔軟な履修・単位取得を実現。
- PBLでのグループワークをオンラインで日印学生が協働して取組み、一定の成果をあげたことにより、今後、オンラインを取り入れた共修も選択肢となりうる事が確認できた。
- オンラインインターンシップを終了した学生の成果報告会を開催し、日印教員、コンソーシアム企業参加者の前で、英語による発表・質疑応答をしっかりと行う様子が確認でき、渡航できない環境の中でも、本プログラムの高い教育効果を、日印双方及びコンソーシアム企業とで共有することができた。
- 2021年3月に国際運営委員会をオンラインで開催した。コロナ禍での実施状況、参加校の現状を確認し、今後に向けた改善点等について協議した。
- 所定の単位を修得した本学学生1名に共同修了証が授与された。



〈オンラインインターンシップ報告会の様子〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- 本学のセントラル・オフィスとインド工科大学各校のリエゾン・オフィスとの連携により、コロナ禍の中でも、学生募集、学生の派遣・受入等、評価、プログラム共同修了証の授与等、プログラム運営をスムーズに進めることができた。
- 日印学生が共修するためのバーチャルな環境の整備、これまでに蓄積したeラーニング教材を活かした教育の機会を提供した。
- 共修の前にオンライン開催した学生交流会には、本学学生6名、IIT生13名、教職員9名が参加し、学生同士が活発に交流しお互いを知るよい機会を設けたことで、その後の国際共修を活性化することにつながった。



〈オンライン学生交流会の様子〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及



〈教育交流研究会の様子〉

- ホームページ(<https://eprogram.eng.hokudai.ac.jp/office/iao/stsi/>)、パンフレット、SNS、シンポジウム等で、日本語・英語での本事業の概要・目的・実施状況に関する情報を引き続き発信した。
- 2020年度に開催した全2回6名の学生による成果報告会には、企業からも延べ12名の参加があった。
- 外部講師を招聘したFDでは、海外派遣に伴う危機管理について、道内外7大学からを含め40名が学んだ。
- 教育交流研究会を開催し、インドとの交流事業を実施する3大学と本学の教員がコロナ禍での取組を共有したところ、学内外、産学から29名の参加があり、産業界も含めた日印人材育成について活発な意見交換の場となった。

■ グッドプラクティス等

- プログラム修了生から、コンソーシアム企業や、インドでの社会インフラ開発プロジェクトを実施する企業、環境省など、引き続きプログラムが目標とする「持続可能な輸送システムと社会インフラの構築」に関係する分野へ人材を輩出しており、プログラムの経験を活かしたキャリア形成に寄与した。

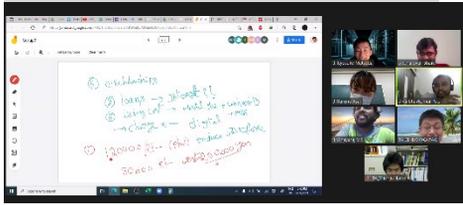
5. 取組内容の進捗状況(令和3年度)

【北海道大学】

【事業の名称】(選定年度 平成29年度・タイプA(インド))

持続可能な輸送システムとインフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム(STSIプログラム)

■ 交流プログラムの実施状況



〈「STSI基礎論」でのグループワークの様子〉

- 令和3年度は、本プログラムにかかるSTSI基礎科目をオンラインで開講した。
 - 「STSI基礎論」(2単位)本学学生5名、インド工科大学(IIT)生10名受講
 - 「インド言語・文化基礎」(1単位) 本学学生6名受講
 - 「日本語・文化基礎」(1単位) IIT生10名受講
- 単位取得を伴うインターンシップは、オンラインで開講し、本学学生3名を派遣し、IIT生8名を受入れた。
 - インターンシップ(2単位)
- 全ての修了要件を満たした本学学生3名およびIIT生8名に修了証を授与した。
- 令和4年度の受入学生の募集は12月から実施し、9名の受入が承認された。本学からは延べ7名を派遣予定である。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

IITハイデラバード校へ1名、ボンベイ校へ2名の学生が、オンラインインターンシップで2ヶ月～4ヶ月程度、研究指導を受けた。5名の学生がSTSI基礎論を受講し、IIT生とのグループワークを行なった。

○ 外国人学生の受入

IITハイデラバード校から3名、ボンベイ校から2名、マドラス校から3名の計8名の学生を1～2ヶ月程度、オンラインインターンシップで受入れた。このうち10名の学生がオンラインで履修し単位修得をした。

| | R3 | |
|-------|----|----|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 21 | 6 |
| 学生の受入 | 21 | 14 |

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取り組み

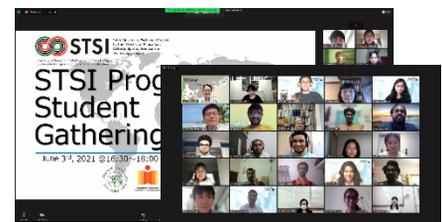
- STSI基礎科目の全てを、オンライン会議システムやeラーニング教材を用いて提供し、コロナ禍での学生の受講環境に合わせた柔軟な履修・単位修得を実現した。
- オンラインインターンシップを終了した学生の成果報告会を開催し、日印教員、コンソーシアム企業参加者の前で、英語による発表・質疑応答をしっかりと行う様子が確認でき、渡航できない環境の中でも、本プログラムの高い教育効果を、日印双方及びコンソーシアム企業と共有することができた。
- 2022年2月、国際運営委員会をオンラインで開催し、5年間の成果と課題、6年目以降のプログラム運営について協議した。その結果、他の世界展開力強化事業と融合したうえで継続することが確認された。
- 所定の単位を修得した本学学生3名、IIT生8名に共同終了証が授与した。
- 2021年11月に外部評価委員会をオンラインで開催し、これまでの成果について高い評価を受けるとともに、修了生名簿のデータベース化するべきなど、今後のプログラム改善に向けての助言を得ることが出来た。



〈インターンシップ報告会の様子〉

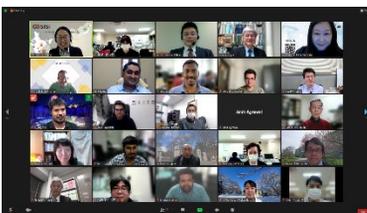
■ 外国人学生の受け入れ及び日本人学生の派遣のための環境整備

- 本学セントラル・オフィスとインド工科大学各校のリエゾン・オフィスとの連携を密に行うことにより、コロナ禍でも、学生募集から修了証の授与までのプログラム運営をスムーズに進めることができた。
- 日印学生が共修するためのバーチャルな環境の整備、これまでに蓄積したeラーニング教材を活かした教育の機会を提供した。
- 共修の前にオンライン開催した学生交流会には、本学学生が5名、IIT生15名、教職員8名、コンソーシアム企業から10名が参加し、学生同士が活発に交流しお互いを知るよい機会を設けたことで、その後の国際共修を活性化することにつながった。



〈学生交流会の様子〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及



〈成果公開シンポジウムの様子〉

- ホームページ(<https://stsi.oia.hokudai.ac.jp/>)、パンフレット、SNS、シンポジウム等で日本語・英語での本事業の概要・目的・実施状況に関する情報を引き続き発信した。
- 2021年に開催した全7回11名の学生による成果報告会には、コンソーシアム企業からの延べ38名を含む計88名の参加があった。
- 2021年11月に開催した外部講師を招聘したFDでは、コロナ禍における国際交流について、道内外9大学からを含め40名が学んだ。
- 2022年3月に成果公開シンポジウムを開催した。日印学生、教職員、コンソーシアム企業の方を含め、46名の参加者と5年間のプログラムの成果を共有した。

■ ゲッドプラクティス等

- 日印サステナブル開発コンソーシアムへは、2021年11月までに13の企業から参加表明があり、学生の報告会に延べ36社から50名の参加があり、学生との活発な意見交換が行われ、有機的な連携が促進された。
- 本学で実施中の2つの世界展開力強化事業(PAREとRJE3)と融合して、令和4年度より「持続可能な社会を実現する国際協働型人材育成プログラム(One program for Global Goals、通称OGGs)」として発展的に展開することになった。